

## 『聖徒にふさわしく』を求めて

エペソ人への手紙 5 : 3 - 5

September.22.2024

### エペソ人への手紙 5 : 3 - 5 (パウロ)

#### Preface

「淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません。わいせつなことや、愚かなおしゃべり、下品な冗談もそうです。」

この御言葉に照らせ合わせますと、私は確実に、キリストと神との御国を受け継ぐことが出来ない者だったと思います。

ここで言う「淫ら」とは、性的なことでもあります。

「汚れた」とは、言語の意味からしますと、主なる神さまとの関係を持たないことであり、「貪る」とは、自分のことだけで、貯め込み、掴んだものを決して分かち合おうとしない、食い意地の張ったという意味の言葉です。

かつて、これすべて漏れることなく当てはまる者でありましたし、今も変わらずこれらのことをはらんでいる悪なる者であるにもかかわらず、キリストと神との御国を受け継ぐ者とされたのは、ただただ主イエス様の十字架の贖い無しには、到底有り得ないことです。

私は小さい頃から、淫らなことやわいせつなこと、下品な冗談が頭の中を巡り、巡っただけでなく、口にも出し、行動にも起こし、「どうせ人は皆、淫らだし、わいせつだし、下品なんだから、それをそうでないかのような顔をして、むっつり助平のような人は信じられない。そんな人として嘘っぱちだし、偽善だ」と思いながら、後ろめたさはあるもののあまり悪びれることもなく、出来るだけ変に正直に、自分の中に沸き起こる淫らな思い、下品な言葉、わいせつな行いを表そうと、クリスチャンになる前までしていたように思います。

また全くもって、まことの神様を知らない汚れの中に生きていましたし、食い意地が張っていることは、隠しようのない事実として、今もこの体が表しています。

#### Part One

淫らなことわいせつなことについて、私が初めて具体的に触れたのは、小学校 2, 3 年生ぐらいの頃だったと思います。

所謂成人向け雑誌を好き好んで目にするようになったのは、小学校の友達と、道端や公園の端のようなところに落ちているのを拾って見たのが、最初だと記憶しております。

そういう世界があるということに、子どもながら惹きつけられ、それからというものの頭の中には、女性の裸のことだったり、一日も早く、一人でも多くの女性と性的関係を持ちたいということでした。

「どうすれば、女性にもてるようになるのか?」、「どうすれば、一日も早く、女性と性的関係を淫らに持つことが出来るのか?」ということで、頭の中がいっぱいだったように思います。

小学校の3年生の時には、学校での七夕の笹飾りに書く願い事に、「女にもてますように」と書いて、担任の先生にダブルびんたを喰らいながら、こっぴどく怒られたことを今でも覚えております。

そんなことで頭の中がいっぱいだった小学6年生の私にとって、父の意向で、私立の中高一貫の男子校に進学しなければならなくなったのは、非常に残念なことではなかった。

「何とかして今のうちに、性的関係を許してくれる彼女を作らなければならない」と焦って、小学校の卒業式後や中学校に入ってから、何人かの女子に「お付き合いしてください」と告白をして、すべて撃沈したことは、「この世の流れに従うよう働いている空中の権威を持つ支配者、悪霊に従い、肉の欲のままに生きようと罪の中に死んでいた生まれながら神の御怒りを受けるべき子ら」であることを否定出来ない、苦恥ずかしい記憶として残っております。

また中学2年生の時、仲の良かったある友達が、「自分は親公認で、車でホテルに連れて行ってもらい、彼女と性交渉をしている」と笑いながら、話してくれたことがありました。

その時、「俺は、お前たちと違って大分先を行っているんだ!」と誇ったように顔は笑っているけれども、目の奥にある濁りと言いましょうか、オドオドしたと言いましょうか、「本当にこれで良いのかなあ」という微かな惑いと恐れのようなものが、彼にあったことを、今ならば思い返すことが出来ます。

でも、その臃げな表情のことなど、その時は気にも留めず、中高生活を送りました。

そして大学生になって、一人暮らしを始めると、「これでやっと、親の目をいっさい気にせず、気兼ねなくエログロなコンテンツに思う存分触れ、経験することが出来る」と思っていましたし、実際に触れました。

ところが大学3年生の時、イエス様に掴まって、クリスチャンとなるんです。

クリスチャンになった私にとって、何が一番罪深いこととして迫って来たかと言いますと、それまで、淫らで、わいせつで、下品なことに心縛られ、惹きつけられ、ある意味それを目的に人生を生きたいと思っていたことでした。

勉強することも、スポーツをすることも、結局行き着くところ、それが裏の目的であったということは、隠しようのない事実でした。

その事実が、イエス様の前にあってたまらなく恥ずかしく、人に対しても申し訳なく、汚い、汚れている、罪人であるという思いに満ち溢れました。

そして、イエス様のお語りになったある言葉に出会い、それまで感じていた性的なことに関する薄っぺらい罪悪感や、「いや大丈夫! だってみんなそうだし、僕なん

か全然まだ綺麗な方だし、僕なんかより、よっぽどエログロな人たちが沢山いる」と、自分で自分を正当化するような思いを木端微塵にされました。

### マタイの福音書 5 : 27 - 30 (パワポ)

「情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。」

淫らな、わいせつな、下品な罪という罪において、イエス様の前に言い逃れ出来るようなことは、微塵もない。

右の目をえぐり出すほどに、手を切り捨ててしまうほどの罪だということにショックを受けると同時に、ある種の清々しい答えを得たようにも思いました。

それまで誰もこんなにはっきりと、「それは、いけないことです！ 罪です！」と教えてくれたこともなければ、指摘されたこともなく、「まあみんな、大なり小なり、そうやって世の中回っているんだから、出来るだけ多くの性的刺激に身を任せて、好きに生きられたら良いんじゃない」というような雰囲気のような流れに身を任せていたせいか、このイエス様の言葉は、自分が隠しようのない罪人であるということを指摘されたように感じましたし、「果たして、このイエス様の言葉に当てはまらないような生き方が、これから出来るだろうか？」というような不安を覚え、その場に跪いて祈った記憶があります。

でも祈ったからと言って、女性を情欲を持たないで見るということをそれ以来綺麗さっぱり辞めた、辞められたなんてことはなく、イエス様の赦しと恵みの内に悔い改めさせて頂くということ無しに、クリスチャンなんか出来ないということ告白せざるを得ません。

それでも、ちゃんと変えられているところもあるということも実感出来ること、「なんと不思議で、幸いなことかなあ」と思います。

以前は、身も心も惹き付けられる誘惑であり、魅力であり、目的であったようなこういうことが、今では、「気持ち悪い」、「そんなことの先には、空しさと傷の付け合いしか残らない」、「ああ、なんて空しいことに人は踊らされてしまうんだろう」、「イエス様によって結び合わせられたたった一人の女性と共に生きることは、何て尊いだろう」と思えるようになっていく変化に驚くばかりです。

正に、聖霊のみわざ、神さまの恵み、「世界の基が据えられる前から、キリストにあって選び、御前に聖なる、傷のない者にしよう」とされる神の熱心としか告白しようがないと思います。

## Part Two

本来、男女という性は、神さまが、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神のお三方だけれどもお一方であるという三位「一体」の真理を、人は神のかたちに創造されたということゆえに、私たち人間にも、「一体である」という比類なき恵みや祝福を分かち合い、誰かと一体であるということの最上の幸いを味わわせて下さるためにお

与え下さったものですが、

人は、神を裏切り、神に背を向け、神から離れ、神無しで自分が神となって生きようとしてからというもの、男女という性は、神聖な一体という面は薄れ、または忘れ去られてしまい、「刺激」という快樂に成り果ててしまいました。

このことは、創世記6：2に、「元々神の子らであった人の子らは、自分たちの目に適う、刺激の度合いに従って、性のパートナーとして相手を選ぶようになった」と書いてある通りですね。

男女が性的に一体となることは、唯一まことの神が、三位一体なる「一体」を体現しておられるお方であるという真理を味わわせて頂きながら、互いに唯一無二の比類なき神のかたちに造られた尊い人であるということを感じる最も基本的な、決して失っても揺るがしてもならない、あらゆる関係という関係の土台のような祝福でしたが、

人は、神を忘れる、神を無視する、神を知らないという罪を犯すという結果ゆえに、男女という性を刺激の追及のようなものにしてしまい、互いに尊重し合うという愛の関係ではなく、利害が絡み合うようなものに落とされてしまいました。

正に、サタンが、神と人との関係のみならず、人と人との関係を壊し、引き裂き、こんがらがらせ、面倒くさがらせ、ただの刺激の追及へと追いやった結果とも言えるでしょう。

刺激がある時はいいけれども、刺激が薄まれば、また次の刺激、次の刺激へと、男女関係、性的関係、または人間関係という、神が「一体」であられるお方であるということ、人が身をもって知れる大切な「一体」という関係を壊されてしまいました。

### Part Three

旧約聖書の中には、数多くの信仰に厚い信仰者たちが登場してきますが、彼らでさえも、性的情欲に悩まされ、罠にはまり、さらには自らの意思で、刺激を求め、その罠に甘さを見出しながら陥っていき、結果、苦みに苛まれるという人々が少なくない数登場してきます。

男性ばかりでなく、女性も登場します。

その中でも有名な人として皆さんも思い浮かぶのが、ダビデという方ではないでしょうか。

ダビデは、神さまが、「ダビデゆえに、ダビデゆえに」と、その子孫たちが主なる神様の目に適わない罪な生き方を選び取って行った時も、「ダビデゆえに、あなたがたをなおも赦し、なおも愛し、なおも慈しみ、なおも忍耐する」とおっしゃるほどに、神に愛された信仰者でした。

そんな敬虔な信仰者であったダビデも、淫らでわいせつな行いに自らの意思でまんまと陥り、多くの人を傷つけ、自らも傷つき、その性的罪を犯したことによって、自分が逃れようのない罪深い人間なんだということ、深く深く認識しました。

詩篇51篇に行ってみましょう。

(題を読む 忠誠心に厚かった臣下の妻を寝取るという性的貪りという罪を犯した後祈った祈りです)

## 詩篇 51 : 3 - 5 (パワポ)

ダビデは、自らも淫らでわいせつなことに陥ってしまう罪人であるということを、その生き様の中で露呈し、告白し、神に心を砕き砕かれ、祈りました。

このダビデの赤裸々な告白が、どれだけ多くの人に慰めとなり、癒しとなり、信仰のまた新たな局面へと導き出して行ったことか分かりません。

一国の王としてのみならず、敬虔な信仰者だと人々から慕われていた一人間としても当然、人に隠しておきたいようなことを、世界のベストセラーである聖書に書き残し、時代や国や民族を超えて読み継がれることを通して、数えきれない沢山の人々に、信仰とは、良い行いをどれだけ積むことで計られたり、良し悪しや優劣を決められたりするものではなく、葛藤しながら、戦いながら、主の前に心を砕きながら、さらけ出しながら、神の恵みなしには、神の赦しなしには、神のあわれみなしには1mmたりとも進めず、骨身に染みる程に、髓の髓に至るまで、綺麗さっぱり余すところなく罪人であることを認める過程であるというのを示して下さいました。

そして、それでも期待され、変えられ、神の子とされたという事実が揺るがされることはないということを噛み締めながら、自らを献げながら三位一体の神を礼拝することを第一にして生きることであるというのを、ダビデは、その生き方、人生、姿を通して、私たちに教えて下さっています。

しかも、主イエス様は、そんな不完全どころか罪まみれのダビデの裔として、この地上にお生まれなさいました。

ヘブル書の言葉にある通り、正に、「私たちの大祭司主イエス様は、私たちの弱さに同情出来ない方ではなく、あわれんで下さり、恵みを下さりながら、折にかなった助けを与えて下さる方」ですね。

### Part Four

今日の聖書箇所エペソ書 5 : 3 - 5 のような御言葉は、私たちにとって、ややもすると、人を見下し、裁くための物差しや剣のような言葉にしてしまいやすき箇所かもしれません。

「あの人は、この人は、何て淫らで、汚れていて、貪るのだろうか。キリストの聖徒としてふさわしくない。人としても、どうかと思う」という風にですね。

でも違います。

その逆ですね。

「なんと私という人は淫らで、汚れていて、貪り、口にすべき感謝よりも、人をのしり、蔑み、裁くような愚かなおしゃべりが口をついて出て来てしまうのだろう…」と、自分自身にこそ当てはめ、適用させる御言葉なのだと思います。

先程話したダビデという方は、バテ・シェバという女性との姦淫の罪を犯した後、

その淫らな行いゆえに、多くの苦しみを通り、経験しました。

そして、その時ごとに、彼が信仰者として掴み続けたのは、主なる神の前に遜り、人の前にも出来る限り正直に、自らの罪人さ加減を表明していくことでした。

そうして、どんな信仰告白にまで至ったかと言いますと、ダビデ自身の姦淫の罪を発端にして実の息子に裏切られ、王座から引きずり降ろされ、息子に命狙われる立場になった時にも、主なる神様の前にある罪深き罪人であることを告白しました。

### サムエル記第二 16 : 10 - 11 (パワボ)

「私がこんな目に合っているのは、『あの人が悪い、この人が悪い』ではなく、私自身が神の前にあって罪深い罪人であるゆえだ。今、私が受けているこの苦しみは、私の罪ゆえだ」と、ダビデは告白します。

### Conclusion

私たちはかつて、淫らな者、汚れた者、貪る者である偶像礼拝者であったことにも気付かず、キリストと神との御国を受け継ぐなんていう人にとって最も大切なことなど、つゆも知らずに生きていた者たちでした。

でも時に適って、私たち一人一人をその御前に召し出し、御前に聖なる傷のない者にしようと、みこころに従ってご自分の子らしい者へと成長させるという約束を頂いている者となりました。

これまでも何度かお話ししました通り、約束は、約束を交わした両者がそれを守って、初めて約束はなされるものです。

だからこそ、今日の御言葉ですね。

「聖徒にふさわしく、あなたがたの間では、聖徒にふさわしく」という御言葉です。

なおも失敗しますし、なおも転びますが、「聖徒にふさわしく」という約束のために、主が熱心に働いて下さっていることを覚えて、「聖徒にふさわしく」という特権、光栄を求めて生きたいと思うのです。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 5 : 3, 4 c